慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	国際シンポジウム「医療人類学の最前線I・II」報告： （2009年1月10日〔三田キャンパス東館8F〕、23日〔三田キャンパス東館GSEC-Lab〕）
Sub Title	
Author	北中, 淳子(Kitanaka, Junko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.7, (2009. 3) ,p.3- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000007-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国際シンポジウム「医療人類学の最前線 I・II」報告

（2009 年 1 月 10 日〔三田キャンパス東館 8F〕、23 日〔三田キャンパス東館 GSEC-Lab〕）

2009 年 1 月に、文化人類学グループでは「医療人類学の最前線 I・II」と題して三田で二回シンポジウムを行った。医療・社会科学の幅広い分野からの研究者が集まり、両日とも 90 名を超える参加者数を記録し、ディスカッションの時間も足りない程の盛り上がりを見せた。

19 世紀の進化論や遺伝学の登場が、人間理解の根本的な変革をもたらしたように、一世紀以上を経て新たに台頭してきた遺伝子の言説は、人々の自己意識を大きく変化させる可能性を秘めている。ゲノム計画や遺伝子診断を通じて、私たちは今まで手にすることのできなかった自らの運命についての「神託」を受ける日が近いともいわれる。しかしその潜在的影響力にもかかわらず、専門家と一般の人々の理解の間には大きな隔たりがある。現時点での遺伝の知識・技術の不確実性は専門家には認識されているものの、単純化された言説が一般に流布することで、臨床現場で混乱が生じることも少なくない。このような問題意識から、McGill 大学・医療社会研究・人類学部の Margaret Lock 教授をお招きして、先端医療技術が新たにもたらす希望と不安の両面についてお話しいただいた。両日の講演とも、体系化・組織化されないが故に沈黙させられやすい、一般の人々の声にどう耳を傾けていくことができるのか、人類学的探究の将来の方向性を考えさせられる内容であった。

ロック先生は、北米における医療人類学の第一人者であり、日本でも『脳死と臓器移植の医療人類学』、『更年期：日本女性が語るローカル・バイオロジー』、『都市文化と東洋医学』等を通じて広く知られている。第一回目のシンポジウム「遺伝、神託、バイオテクノロジー」（10 日、東館 8 階）では、先生に遺伝研究、特にアルツハイマー病に関しての人類学的分析をご報告いただき、それに対して生命倫理の立場から東京大学の米本昌平先生に「科学革命としてのヒトゲノム計画」と日本の状況を、同大学人類学の Mohacsi Gergely 氏に糖尿病の人類学的調査についてご発表いただいた。また、科学史の観点から立命館大学の松原洋子先生、行動遺伝学の立場から慶大の安藤寿康先生、そして同大の宮坂敬造先生のコメントがあった。

第二回目の「国家、感染、バイオポリティックス」（1 月 23 日、GSEC-Lab）では、ロック先生は「新優生学」の名で一般に語られている現象に触れ、その複雑さを理解するためには、旧来型の国家からのトップダウンの権力だけでなく、慣習や文化に彩られたボトムアップの人々の欲望や、社会的不平等の構造を分析する必要を指摘された。この日の第二部では、グローバル化する医療テクノロジーが、国境を越えて脅威をもたらす感染症に対してどのような攻防を可能にしているのか、またそこでどのような矛盾が生じているのか、異なる分野の研究者から報告があった。京都大学脳生理学の美馬達哉先生には感染症をめぐるリスク・パニックについて、慶大の鈴木晃仁先生には医学史の立場から日本における近代化と感染症について、また東京大学の香西豊子氏には幕末日本における「感染」概念について、MIT・医療政治学の Peter Doshi 氏には、感染症をめぐる疫学言説とリスク概念についてご講演いただいた。

遺伝病と感染症をめぐる言説には、その脅威の性質、スティグマの有無、攻防の主体といった点で極めて対照的な特徴がみられる。このような相違点に留意しつつ、日独における遺伝学の成立について東京大学・医療社会学の市野川容孝先生にご講演いただき、総括として宮坂先生にコメントをいただいた。活発な議論となり、領域を超えて意見を交換することの面白さを確認できる実り多い会となった。司会は両日とも慶大・医療人類学の北中淳子が担当。

（北中淳子）